

## 大学院生の私生活主義的意識に及ぼす遍路体験の影響

田村 隆 宏\*, 南 隆 尚\*\*

(キーワード 遍路体験, 教員としての資質, 私生活主義的意識)

近年, 四国遍路は映画やメディアで盛んに取り上げられるなど, 社会的ブームとなりつつあり, 遍路を行う人数も増加している。その目的も本来の宗教的な「巡礼」, 仏門の「修行」から転じる形で, 「癒し」や「自分探し」など, 僧籍を持たない者にとっても重要な意味を持つものになってきている。これは例えば, 「引きこもり」や「ニート」が「遍路」における「接待」などの地域交流を続ける中で, 自己啓発されていく様子がメディアで報道されたり, 映画で紹介されたりしていることから示されることである。このように, 「遍路」は「生き方」を自問する機会として捉えられていることが理解できよう。

鳴門教育大学では平成17年度から, 大学院修士課程に「四国遍路と地域文化」という授業が開設された。本授業の主旨と目的は「歩き遍路の体験, 現地における遍路文化を支えていく人々との交流を通じて, 教員としての資質を高め人間教育を目指すものである。その活動の第一は, 四国遍路を培ってきた, 地域住民の諸活動(ボランティア活動など), 自治体のサポート体制, 遍路寺院の活動など, 現地における人々からの地域文化を担うことの意義と取り組み方を学ぶ。第二に, 遍路を歩く中で, 自然と人とのふれあいから自己を見つめ直す機会を与える。」といったものである。

さらに, 鳴門教育大学では平成16, 17年度に文部科学省新規事業「道德教育の充実のための教員養成学部等との連携研究事業」が実施され, 平成17年度には道德教育を充実させる活動の一環として地域の小学校から遍路体験を希望した17人を1泊2日の日程で遍路体験を行うという活動が展開された。その活動の中に「四国遍路と地域文化」の受講生が小学生の活動をサポートすることが授業内容に組み込まれた形で実施された。

平成17年に実施された「四国遍路と地域文化」の授業概要は以下の通りである。受講対象は大学院1, 2年生であり, 29人が受講した。授業は9月30日から10月2日までの3日間の集中講義形式で行われた。担当教員は人間形成講座, 教育臨床講座, 社会教育講座, 保健体育教育講座に所属する9人であった。

具体的な授業の内容は, まず事前オリエンテーションと事前講義で, 空海と四国遍路の歴史, 近世の遍路とその周辺, 遍路の石碑と遍路墓, 遍路道の地理理解などを学び, 遍路体験初日では一番札所霊山寺での住職の講話を聞き, その後徒歩の移動で二番, 三番札所をまわり, 四番札所の大日寺で再び住職の講話を聞き, その後五番札所を経て, 六番札所安楽寺で夜のお勤めを経験し, 宿泊をするという内容であった。2日目には安楽寺, 及び十番札所にて小学生が合流し, その後, 徒歩で移動して, 藤井寺にて吉野川市鳴島町産業経済部商業観光課の岡田晋氏による講義「現在の四国遍路に対する吉野川市の取り組みについて」を受講し, 安楽寺にて夜のお勤め, 及び小学生との交流ミーティングをして宿泊をするという内容であった。3日目は11番札所藤井寺から長戸庵, 柳水庵, 一本杉庵を経て焼山寺までを徒歩で移動し, 焼山寺で神山町産業観光課の栗飯原一氏によるお話, 及び神山町のボランティアメンバーと交流するという内容であった。

以上が, 「四国遍路と地域文化」の具体的な授業内容である。このような体験を通じて, 「教員としての資質を高め人間教育を目指す」ことや「自己を見つめ直す機会を与える」ことが目的とされているわけである。それでは, 実際にこの遍路体験によって, 受講生は「教員としての資質を高め人間教育を目指す」ことや「自己を見つめ直す機会を与える」ことに関わる影響を受けているのであろうか。

久世・宗方・和田・後藤・浅野・宮沢・二宮・大野・内山・鄭(1986)は, 1970年代から1980年代の青年の意識調査に関する文献を検討した結果, 当時の日本青年の特徴として, 「社会への関わり方の消極さ」と「自分自身へや身近な生活への関心の増加」といった私生活主義的な意識が強くなっていることを指摘している。この傾向は, 30年近く

\*鳴門教育大学・幼年発達支援講座

\*\*鳴門教育大学・生活・健康系(保健体育)教育講座

経った現在、「ひきこもり」や「ニート」といった問題がクローズアップされている現状を見ても、当時よりもより強くなっていると考えられこそすれ、弱くなっているとは考えにくい。現在の青年においても私生活主義的な意識が依然として強いとすれば、子どもを教育する立場にある教員の資質としては相応しくない傾向を持ち合わせているといえよう。

「四国遍路と地域文化」における遍路体験が「教員としての資質を高め人間教育を目指す」ことや「自己を見つめ直す機会を与える」ことを目的としているものであるならば、遍路体験によって受講生の私生活主義的な意識が改まるような影響が見られた場合に、その目的の一側面が達成されたといえるのではなからうか。そこで、本研究では、この授業における3日間の遍路体験が受講生の私生活主義的意識にどのような影響を及ぼしているかについて検討する。

## 方 法

**被調査者** 被調査者は「四国遍路と地域文化」の受講生のうち3日間の遍路体験に参加した大学院生24名であった。  
**調査方法** 調査方法は、遍路体験の前後で受講生の私生活主義的意識を調査し、その変化を分析するというものであった。私生活主義的意識の調査に関しては、久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野（1988）の私生活主義に関わる意識を調査するための尺度の項目22項目（「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関わる11項目、「自分の感覚や実感の重視」に関わる11項目）を用いた。各項目への回答は、例えば「社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う」といった項目に対して、1「非常に反対」、2「反対」、3「どちらともいえない」、4「賛成」、5「非常に賛成」の五段階で評定し、項目に関わる自己の意識の強さを査定するものであった。遍路体験前と体験後の各項目に対する評定値の変化について分析することによって受講生の私生活主義的意識が遍路体験によってどのように変化するかが明らかにされる。

## 結果と考察

### 「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関わる項目の結果

表1は被調査者が遍路体験前と体験後に回答した「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関わる項目に対する平均評定値と標準偏差（SD）を示したものである。

遍路体験の前後で、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関する意識が変化したか否かを検討するために、各項目の遍路体験前と体験後の平均評定値の差が有意なものであるか否かを検定するためにt検定を行った。表中の太字ゴシックで示された項目で、遍路体験前と体験後の平均評定値の間に不等号を付されものが有意差、もしくは有意傾向のみられた項目である。

表1 遍路体験前と体験後の「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関わる各項目に対する平均評定値と標準偏差(SD)

項 目	遍路体験前 平均(SD)	遍路体験後 平均(SD)	検定
(1) 働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい	<b>2.67 (0.96)</b>	<b>2.88 (0.80)</b>	+
(2) 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない	2.50 (0.77)	2.67 (0.64)	
(3) 結局、人のことは自分とは関係のないことだ	2.13 (0.90)	2.08 (0.50)	
(4) 自分ひとりが努力しても世の中はよくならない	2.54 (0.83)	2.33 (1.00)	
(5) ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない	2.00 (0.72)	2.04 (0.81)	
(6) 戦争や飢餓など日常生活と関係のない問題は忘れがちである	2.50 (0.83)	2.63 (0.92)	
(7) 社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う	<b>1.83 (0.70)</b>	<b>1.63 (0.57)</b>	+
(8) 政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどうである	2.16 (1.00)	2.00 (0.88)	
(9) 現状に甘んじ 与えられた範囲内で自分の生活を楽しむ	2.54 (1.02)	2.46 (0.88)	
(10) 何事も深く考えず、その場のぎで過ごしている	<b>2.21 (0.88)</b>	<b>2.46 (0.83)</b>	+
(11) 毎日毎日あくせくするよりものんびり暮らしたい	<b>3.38 (1.01)</b>	<b>2.96 (0.82)</b>	*

\*p<.05, +p<.10

(7)「社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う」については、遍路体験前よりも体験後の方が評定値が低いという有意傾向がみられた ( $t(23)=1.55, p<.10$ )。この結果は、「社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う」という意識が遍路体験によって弱くなったことを示している。この意識の変化には、被調査者が長時間、険しい山道を歩き、札所でのご住職の講話や地域の遍路に対する取り組みについての講義、途上でのもてなしを受ける中で、様々な社会問題について考える機会が得られたことが影響しているのではないと思われる。

(11)「毎日毎日あくせくするよりものんびり暮らしたい」についても、遍路体験前よりも体験後の方が評定値が低いという有意差がみられた ( $t(23)=2.01, p<.05$ )。この結果は「毎日毎日あくせくするよりものんびり暮らしたい」という意識が遍路体験によって弱くなったことを示している。この意識の変化には、わずか3日間の体験であったとしても、遍路経験の中で様々な活動に取り組むことで、何事にも一生懸命取り組む姿勢が少なからず育まれたことが影響しているのではないと思われる。

(1)「働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい」については、遍路体験前より体験後の方が評定値が高いという有意傾向がみられた ( $t(23)=1.42, p<.10$ )。この結果は、「働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい」という意識が遍路体験によって強くなったことを示している。前述の(11)の結果では、「毎日毎日あくせくするよりものんびり暮らしたい」という意識が遍路体験によって弱くなることが示されたのに対して、この(1)の結果は矛盾した結果のように感じられる。ただし、評定値をみると遍路体験の前後とも2点台であり、「働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい」という考え方に対しては否定的意識を持っていることがわかる。しかし遍路体験後には、肯定的意識を示すようには変化していないものの、否定的意識が弱まるという結果になっている。これについては、例えば、遍路体験という非日常的な環境の中で、日常の環境よりは自由を感じ、様々な行動的な活動を体験したことが影響している可能性も考えられる。(11)の結果との矛盾については、(11)にはものんびり暮らしたいという非活動的なニュアンスが含まれた意識であるのに対して、自由な生活を楽しみたいという活動的なニュアンスが含まれた意識である。遍路体験によって、より活動的な意識が強くなったことが、この結果の違いに反映しているのかもしれない。しかしながら、「働くことや勉強することを最小限にして～」という意識が強くなるという結果は遍路体験による意識の変化としては予想外のものであろう。この結果に、こういった要因が影響しているかを明白にするためには、さらなる詳細な検討が必要である。

(10)「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」については、遍路体験前より体験後の方が評定値が高いという有意傾向がみられた ( $t(23)=1.45, p<.10$ )。この結果は「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」という意識が、遍路体験によって強くなったことを示している。この意識の変化には、遍路体験前には、評定値も2点台という低いことから、「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」ということはそれほど自分でも意識していなかったのに対して、遍路体験の中で、札所でのご住職の講話や地域の遍路に対する取り組みについての講義を受けたことや、子ども達との様々な形でのコミュニケーションを通して、物事をより深く考える機会が得られたことで、自分が今「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」ということをより強く意識するようになったことが影響しているのではないと思われる。

以上の項目以外の平均評定値には遍路体験前後で有意差、もしくは有意傾向は見られなかった。しかしながら評定値を見ると、(4)「自分ひとりが努力しても世の中はよくならない」や(8)「政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどろである」という項目については遍路体験によって意識が弱まるように変化している。本調査の遍路体験はわずか3日間であったが、さらに長期間に渡って体験できる機会があれば、こういった項目に関わる意識もより顕著に変化するということも考えられよう。さらなる検討が不可欠である。

#### 「自分の感覚や実感の重視」に関わる項目の結果

表2は被調査者が遍路体験の前後に回答した「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」に関わる項目に対する平均評定値と標準偏差(SD)を示したものである。

遍路体験の前後で、「自分の感覚や実感の重視」に関する意識が変化したか否かを検討するために、前節と同様のt検定を行った。表中の太字ゴシックで示された項目で、遍路体験前と体験後の平均評定値の間に不等号を付されたものが有意差、もしくは有意傾向のみられた項目である。

(4)「世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ」については、遍路体験前より体験後の方が評定値が高いという有意傾向がみられた ( $t(23)=1.45, p<.10$ )。この結果は、「世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ」という意識が遍路体験によって強くなったことを示している。この意識の変化には、わずか3日間の体験であったとしても、遍路経験の中で様々な活動に取り組むことで、自分のやりたいことに積極的に取り組む姿勢

表2 遍路体験前と体験後の「自分の感覚や実感の重視」に関する各項目に対する平均評定値と標準偏差 (SD)

項 目	お遍路経験前 平均 (SD)	お遍路経験後 平均 (SD)	検定
(1) 自分で納得いかないことはしたくない	3.67 (0.86)	3.58 (0.77)	+
(2) 何事も自分で確かめなければ気がすまない	3.58 (0.77)	3.75 (0.79)	
(3) 自分の気持ちをいつわって行動するのはいやだ	3.86 (0.71)	3.91 (0.61)	
(4) 世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ	<b>2.88 (0.84)</b>	<b>&lt; 3.13 (0.94)</b>	
(5) 型にはまらず、自分なりのやり方で物事に対処していく	3.50 (0.77)	3.63 (0.77)	
(6) 他者に教えてもらって納得するのでなく、何事も自分で試してみるべきである	3.67 (0.64)	3.67 (0.64)	*
(7) 自分のやりたいことをする時、まわりの人が対してもやり通すべきだ	3.33 (0.64)	3.21 (0.66)	
(8) みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない	<b>3.08 (0.82)</b>	<b>&lt; 3.50 (0.72)</b>	
(9) 結果はどうあれ、自分で試してみることが大事である	3.88 (0.53)	3.96 (0.69)	
(10) 流行を追いもとめるのでなく、自分なりのスタイルを大事にしたい	3.83 (0.70)	3.96 (0.83)	
(11) だまっていると損をするような場合は、必ず発言をする	3.58 (0.77)	3.67 (0.64)	

\* $p < .05$ , + $p < .10$

が少なからず育まれたことが影響しているのではないと思われる。その際、世間の目を気にすることで束縛された意識が弱まり、自分のやりたいことを大切にする傾向が強くなったということは、より積極的に生きる姿勢が育まれたことを示唆するものであり、遍路体験が「生き方」の自問という側面に少なからず影響を及ぼしていることとして注目に値する。

(8)「みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない」については、遍路体験前より体験後の方が評定値が有意に高かった ( $t(23)=2.63$ ,  $p < .05$ )。この結果は「みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない」という意識が遍路体験によって強くなったことを示している。この意識の変化には、遍路経験の中で様々な活動に取り組むことで、何かをやる時にみんながやっているからやるという非主体的な姿勢ではなく、自分が納得しない限りやらないという、より主体的な姿勢が育まれたことが影響しているのではないと思われる。(8)の結果は、(4)の結果と同様に周囲や世間に囚われることなく、自分の意志を明確に持って生きる態度が促されたことを示唆している。わずか3日間であったにせよ、遍路体験によって生き方に関わる態度が変化したということは、少なからず遍路体験が自分の生き方を考え直す契機になったことを示している。

以上の項目以外の平均評定値には遍路体験前後で有意差、もしくは有意傾向は見られなかった。しかしながら評定値を見ると、(2)「何事も自分で確かめなければ気がすまない」、(3)「自分の気持ちをいつわって行動するのはいやだ」、(5)「型にはまらず、自分なりのやり方で物事に対処していく」、(9)「結果はどうあれ、自分で試してみることが大事である」、(10)「流行を追いもとめるのでなく、自分なりのスタイルを大事にしたい」、(11)「だまっていると損をするような場合は、必ず発言をする」といった項目はいずれも遍路体験前より体験後に評定値が高くなっている。これらの項目はどれも自分の意志を明確に持って積極的に生きる態度に関わるものであることから、こういった態度が促されるように変化しつつあることが窺える。本調査の遍路体験はわずか3日間であったが、さらに長期間に渡って体験できる機会があれば、こういった項目に関わる態度もより顕著に促されるということも考えられよう。さらなる検討が不可欠である。

## 総合考察

本研究では、「教員としての資質を高め人間教育を目指す」ことや「自己を見つめ直す機会を与える」ことを目的として掲げられている大学院の講義「四国遍路と地域文化」の中で実施される3日間の遍路体験が、近年の日本青年の特徴として指摘されている「社会への関わり方の消極さ」と「自分自身へや身近な生活への関心の増加」といった私生活主義的な意識に対してどのような影響を及ぼすのかという点に焦点を当て、「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」に関わる意識について遍路体験前と体験後にアンケート調査を行った。

その結果、「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」については、遍路体験によって「社会問題は自分の生活とは全く関係ないことだと思う」、「毎日毎日あくせくするよりものんびり暮らしたい」といった意識が弱まること

が明らかになった。この結果から、遍路体験が自分の生活と社会問題の関わりについての意識化を促したり、のんびり暮らしたいといった非活動的な態度に関わる意識を抑制することに関与していることが示唆される。これらの意識の変化は将来社会に送り出す子どもを教育する立場にある教師の資質を高めるという点では望ましいものである。遍路体験によって「教員としての資質を高め人間教育を目指す」という目的の一側面は達成されているものと考えられる。また、遍路体験によって「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」という意識が強まることが明らかになった。この結果から、遍路体験がそれまでそれほど意識していなかった「何事も深く考えず、その場しのぎで過ごしている」という自分の生き方・態度をより意識させることに関与していることが示唆される。この意識の変化は自分の生き方や態度を捉え直すことから生じたものであると考えられることから、遍路体験によって「自己を見つめ直す機会を与える」という目的は達成されているものと考えられる。

「自分の感覚や実感の重視」については、遍路体験によって「世間の目を気にせず、自分のやりたいことをして楽しむ」、「みんながやっても、自分が納得しないかぎりやらない」といった意識が強まることが明らかになった。この結果から、遍路体験が、周囲に左右されず、より主体的、積極的に物事に取り組む態度を促すことに関与していることが示唆される。このような態度の変化は、教員としての資質を高めるという点でも望ましいものであり、自己を見つめ直すことも深く関わっているものと思われることから、講義で掲げた目標は少なからず達成されているものと考えられる。

本講義の遍路体験はわずか3日間という短期間であったが、その中でも明確に意識の変化が見られたということは、遍路体験の中で経験される様々な活動が私生活主義的な意識を改善することに極めて効果的に関わっていることを示唆するものである。したがって、さらに長期間に渡って遍路体験を行い、今回以上に様々な経験をした場合には、さらに私生活主義的な意識が改善されるという可能性も十分に考えられる。この点については重ねて検討する必要があると思われる。

ただし、遍路体験によって私生活主義的な意識が改善されるような影響が認められたとはいえ、遍路体験の中で経験される活動は、険しい山道を歩くこと、ご住職の講話、地域の活動に関わる講演、地域の人たちや子ども達との交流、接待を受けることなど、多岐にわたっていることから、本研究でみられた意識の変化が具体的などのような経験によって生じたのかという点が明確になっていない。今後の研究では、遍路体験の中に含まれる様々な具体的経験を詳細に分類し、それらの具体的経験と私生活主義に関わる意識の変化との関わりについてさらに綿密に調査していくことが課題になるであろう。

## 引用文献

- 久世敏雄・宗方比佐子・和田実・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・大野久・内山伊知郎・鄭曉齊 1986  
現代青年の社会意識 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 33, 291-302.
- 久世敏雄・和田実・鄭曉齊・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 35, 21-28.

# **The Effects of The Experience of HENRO on The Awareness of Own Privacy Principle in Graduate Student.**

Takahiro TAMURA\* and Takahisa MINAMI\*\*

The purpose of this study was to examine the effects of the experience of HENRO on the awareness of own privacy principle in graduate student. Subjects were 24 graduate students. They were asked to fill out a questionnaire on the awareness of their own privacy principle before and after their experience of HENRO during three days. The questionnaire was comprised of 22 items to measure the degree of the concern with familiar event and unconcern with social event. The result on “concern with familiar event” showed that the experience of HENRO inhibited the undesirable awareness (e.g. “I have nothing to do with social problems.”, “I want to live easy without working hard.”) The result on “unconcern with social event” showed that the experience of HENRO facilitated the awareness on active attitude (e.g. “I shall do the thing I want to do without interest in other’s view.”, “Even if other do something, I don’t do it without my consent.”) It was found through this study that the experience of HENRO have effects on the awareness of own privacy principle in graduate student.

---

\*Department of Early Childhood Education, Care, and Welfare, Naruto University of Education.

\*\*Department of Health and Living Science, Naruto University of Education.